香港の水

木本正次

港の水

木本正次

潮出版社

木本正次（きもと・しょうじ）

大正元年徳島県生まれ。神宮皇学館卒。毎日新聞社に入り，編集局の各部長等を歴任。昭和39年同紙に記録小説『黒部の太陽』を連載した前後から文学活動に専心する。ほかに記録小説としては，本書をはじめ『反逆の走路・小説豊田喜一郎』『東京地底』『砂の十字架・鹿島人工港ノート』『四阪島』その他がある。日本文芸家協会会員。日中国交正常化国民協議会会員。現住所，東京都町田市本町田3450—22

香港の水

初版印刷　1973年3月10日　　**定価850円**

初版発行　1973年3月25日

著者　木本正次

発行者　島津矩久

発行所　株式会社 潮出版社

〒160　東京都新宿区南元町14の1

電話 (357) 7111　振替 東京 61090

印刷／公和印刷　　製本／東京美術紙工

© 1973 Shoji Kimoto　Printed in Japan

香港の水　目次

珍惜用水（チェンセックユンソイ）……七
時の激流……二七
国際入札……四三
異邦の風……六九
舞庁（ムウテイン）の女……一〇七
台風ワンダ……一二五
山頂（ピーク）の霧……一五一
大渇水……一六九
若い世代……一九三
突貫命令……二二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

愛とパンと……二三三
増援隊……二五七
大陸の水……二八七
厚い壁……二九九
深い傷痕……三三一
人柱……三四七
最後の劇……三六九
雪国の墓……三八七
あとがき……三九五

装幀　大歳克衛

香港の水

珍惜用水

関西産業貿易株式会社――略して『関貿』と呼ばれる商社の香港支店の新しい副支店長、矢沢健吉が任地の香港に着いたのは、昭和三十二年八月下旬の、ある午後のことだった。

関貿支店では支店長の逸見勝二郎は停年が近く、矢沢はそのあとを継いで支店長となり、かなり長く在任することになるのが約束されていた。

矢沢は対岸の九竜市街の東の端にある啓徳飛行場まで、支店員の浜崎芳夫に出迎えられ、自動車で九竜の繁華街を通って佐敦道碼頭に着いた。碼頭とは波止場のことである。

そこから自動車のままフェリー・ボートに乗って、十分間ほどでヴィクトリア港を香港島の統一碼頭に渡った。統一碼頭から東の一帯は、中国名で中環、英語名ではセントラルと呼ばれる香港島の中心街で、銀行やホテルや商社などの、十何階から何十階もの壮麗なビルが建ち並んでいる。

関貿の支店は、セントラル地区のやや奥まったあたり、ダズル・ストリートのかなり古ぼけたビルの二階にあって、統一碼頭から自動車では一走りだった。

「矢沢です。ただいま着任いたしました」
事務室の奥まった一隅の、大きな机に端然と向かって、支店長の逸見がいた。矢沢が机の前に進んで挨拶すると、
「ああ、ご苦労だった。——暑かっただろう、まア掛け給え」
おうように矢沢を見て、逸見は机の前の椅子をさし示した。
「いやどうも。暑いにもなにも……日本とは比べものになりませんなア。毎日これでは大変でしょう」
すすめられた椅子に掛けながら、矢沢はハンカチを出して額の汗を拭い、微笑していった。
「いや、そうでもない。気持ちの持ち方次第だ。香港は熱帯だから、熱帯ならどうせ暑いと覚悟をきめとけば、なんでもないものだ」
逸見は、にこりともせずにいった。矢沢はまだ三十七歳の若さだったが、逸見は五十代も半ばといった年配である。しかし厳格な人柄だとみえて、言葉だけでなく姿勢まで、椅子にそり返った端然としたポーズを崩そうとしない。
「それはそうですなア」
矢沢はなんとなく相槌を打ったが、別にその意見に同感しているわけではなかった。相変わらずハンカチで汗を拭うのはやめなかったし、雲一つなく晴れていた啓徳飛行場での、あの灼けつく暑さを忘れようとも思ってはいなかった。
「失礼します」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

矢沢は尊大ぶったり、過度に格式ばったりするのは好みでなかったから、率直にいって上衣を脱いで、自分の椅子の背凭(せもた)れに掛けた。それからゆっくりした動作で、ネクタイを緩めた。

その時、逸見の机の電話が鳴った。逸見は受話器を耳に当てたが、こみ入った用件の相手だったとみえて、矢沢に「失礼するよ」と横柄にいって、椅子をひねって横向きになった。

「水を……一杯頂きたいけど」

矢沢は振り向いて、鞄を持って後ろに立っている浜崎にいった。浜崎は「はア」と返事して、

「撈一杯水(ローヤップソイ)　俾大班吧(ペイタイパンパ)」

大班(タイパン)に水を一杯あげて下さいと、女性はその一人だけしかいない中国人の女事務員に手を上げて、広東語(カントン)で呼びかけた。大班(タイパン)とは、社長とか親方とかといった意味である。

女事務員は立ち上がると、横の戸棚をあけてジャーやウイスキーの壜(びん)などを調べていたが、

「水有呼(ソイモウア)。因為你喲汗婆瀾飲悉了(ヤンワイネーディハンパ ランヤムサイラ)」

――水はない、あんた方がみんな飲んでしまったから、と、これも広東語で甲高(かんだか)く答えた。

「水はないんですって。いつもこうなんです。コーラなら、たくさん冷やしてあるんですが……」

浜崎の情けない声だった。

「ああ、コーラでもなんでも……、別になんでもかまわないけど……」

「そうですか。じゃアまあコーラで我慢しといて下さいよ」

浜崎は女事務員にまた広東語で声高に指図して、ついでに支店長の分も支度させた。女事務員は

日本の普通のオフィス・ガールと同じような簡素な白っぽいワンピースの洋装で、広東語の会話さえしなければ、日本人とも中国人とも、急には見分けがつかないだろう。
「すまないなア。着任早々から勝手をいって……」
冷たいコーラに唇をつけて、矢沢は苦笑していった。
「ご遠慮なくどうぞ。どうせ副支店長には、これからおおいに飲ましてもらうことになるんですから……」
太っていて、やや背が低く、愛嬌のある浜崎は、屈託なく笑って応じる。
(しかし……水が足りないとは聞かされてきたが、飲む水まで置いてないとは!)
笑顔はそのままだったが、矢沢はしかし、心の中では首をかしげていた。見渡すと、事務室は三十坪ほどの、とても奇麗とはいいがたい部屋であった。十人余りの男たちが事務をとっていたが、全部現地採用の中国人たちで、日本人は支店長と浜崎のほかには見当たらなかった。ほかに田口豊と猪股知巳の二人がいるはずだが、いまは外出中のようであった。
(いくら水不足だといっても、飲み水ぐらいは汲みためておけばいいではないか。それに……ここは商社の支店で、われわれは商人なのだ。水は自分たちのためばかりでなく、お客さんだって飲みたいといえば、サービスするのが商人というものではないか!)
それは矢沢には、一種のたるみに思われた。初めてビルの表に立った時に、ビルは古ぼけていてさっぱり見ばえのしないものに思えたが、古ぼけたビルの外貌は、中身の人間たちの思考力まで鈍磨させてしまうのだろうか——。

それらのいっさいにはまるで無関心なように、逸見支店長の長い電話はなお続いている。矢沢は前夜東京での送別会で飲み過ぎたせいか、けさがたから腹具合がおかしかった。

「浜崎君、トイレはどこだろう？」

コーラのコップを置いて、矢沢はいった。

「ご案内しますから……こちらへどうぞ」

先に立って廊下に出ながら、浜崎はポケットから一つの鍵を取り出した。

「トイレのドアは、この鍵であけるんです。出たらまた、すぐ掛けておいて下さい」

「なんだって！」

矢沢は口を尖らせ、思わず立ち停まって浜崎を見た。浜崎は苦笑しながら、

「いや、香港の習慣なんです。香港は個人主義が徹底してますからねえ。よそのビルの人たちや浮浪者にトイレを使われないように、鍵を掛けるんですよ。——そういえば、トイレット・ペーパーだって自分で持って行くんですからねえ。うっかり忘れては大変ですよ」

矢沢は、またもや驚かされてしまった。まったくよくびっくりさせられる日である。

浜崎があけてくれた鍵を受け取って、矢沢はトイレに入った。二坪ほどの狭い部屋で、手前の左側に男性用が二つ並んであり、つき当たりが男女両用のドアであった。矢沢はそのドアをあけて密室に入ると、洋式の便器にゆったり腰をおろした。

「トイレにまで鍵、か——」

苦笑してつぶやいたが、そのうちに苦笑してばかりはいられない現実に、矢沢は気づいた。
（そういえば、トイレの鍵と、事務所に置いてない飲み水とは、同じ思想から出たものかもしれない）
ほかにすることもないこの密室は、考えごとには好適であった。矢沢は考え続けた。
――日本では、多少は名の通った会社なら、どこに行ってもペダルを踏めば冷水の噴き出る水飲み機械が置かれているし、トイレは磨きたてたように奇麗で、すべての訪客に開放されている。トイレット・ペーパーなどを考える必要は、どこに行ってもないのだった。それが香港では……トイレの使用をさえ他人には拒否する精神からは、飲み水のサービスなど、もとより思い浮かばないのが当然かもしれなかった。飲みたいものは、自分の水か、自分で金を払った飲料水を飲めばいいわけである。それは土地土地での風習の違いであって、別にこの支店がたるんでいるわけではないのかもしれない。――
突然、高い小窓を打つ雨の音に、矢沢はふと首をもたげた。小窓からは通りを隔てた向かいの高いビルの屋上に、空がちょっぴり斜めに顔を見せていたが、それはさきほど飛行場に着いた時の、あのギラギラとどぎつく輝いていた、熱帯の夏の青空ではなかった。重い雲が、暗く垂れていて、雨はまだ疎らだが大粒であった。
（いつのまに曇ったのだろう？　でも、一雨降れば涼しくなっていいだろう）
矢沢はあの、空港での暑さを思い起こしていた。――飛行機は前の年からジェット機になっていて、爆音もなく、エア・コンディショニングも快適で、矢沢はついうとうとと居眠っている間に着

いたのだった。

それが、着陸して、地上に降り立つやいなや、たちまち蒸し風呂のような熱気が、四方から彼に襲いかかったのだ。熱気は最初、ズボンの裾から入って素肌の両脚にムーッと気味悪くまとわりつき、たちまち上着をほてらせシャツをほてらせ、やがて全身の肌を燃えあがらせて、分厚く彼を取り巻いてしまった。まことに熱帯の都の任地に着いたという、それは実感そのものであった。

（その暑さも、一雨さえ降れば……）

トイレの中で、矢沢は日本流に考えて落ち着いていたのだったが、みるみる雨脚は激しくなっても、涼気は訪れて来なかった。それどころか、じめじめと湿った重苦しく気色の悪い暑さが密室をひたして、いっそう耐えがたくなってくる。

腹具合は十分ではなかったが、矢沢はトイレを出ることにした。ペダルを踏むと、フラッシュが、申し訳ほどのかぼそい水音を立てた。

手洗い場で、左手を水道の蛇口に差し出し、右手で栓をひねったが、水は出なかった。

矢沢はあわてた。もっと強くひねってしばらく待ったが、水は一しずくも出なかった。

『珍惜用水』

『惜用滴水』

目の高さに、小学生か中学生の習字展覧会の入賞作品のような行儀のいい字で書かれた二枚の半紙が貼られてあるのを、矢沢は見た。

「珍惜用水、惜用滴水……か」

貼り紙を見つめて、矢沢はうらめしそうにつぶやいた。ハンカチを出して、両手をごしごし拭ったが、なんだか汚れが全身にこびりついている気がして、矢沢はひどくいまいましかった。

（珍は普通には『めずらしい』だが、『めず』には愛する、尊ぶといった意味があるはずだ。惜も単に『惜しがる』だけではなくて、愛する、大切にするといった意味があるだろう。さすがは文字の国、中国だけあって、節水ポスターも、単に節約だけでなく、水を愛して大切に使おうと、詩のように呼びかけている――）

広東語のわからぬ矢沢にも、漢字の意味は自分流には汲み取れる。手も洗えぬいまいましさと、妙な感心との入り混じった複雑な気持ちで、矢沢はトイレを出た。浜崎にいわれたとおり、トイレの鍵はキチンと掛けた。

支店長席に帰ってみると、逸見支店長の姿はなくて、そのかわりに、出先から帰ったとみえて浜崎のほかに田口と猪股の二人が、横のソファに掛けていた。矢沢を見ると、二人は立ち上がった。

「ご無事ご着任で……」

「またどうぞよろしく」

東京や大阪の勤務の時に顔見知りだったので、二人は微笑して、下げる頭も軽いようだ。

「ああ、僕のほうこそよろしく」

矢沢も軽くいって、挨拶はそれで終わりだった。矢沢は三人と向かい合ってソファに掛けた。

「支店長は中国人の商社から何か急なご用件だそうで……いずれ歓迎会はゆっくりするからといっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com